

[招待論文：研究論文]

運動競技がつくるランドスケープ

Landscape Made by Sports Games

石川 初

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授

Hajime Ishikawa

Professor, Graduate School of Media and Governance, Keio University

Abstract: オリンピック・パラリンピック大会の開催は大規模な運動競技施設の建設を伴い、それらは都市スケールのランドスケープをつくる。それぞれの施設が大規模となる理由は、運動競技がそのルールとして要求する基盤環境の仕様にあり、それはその競技が成立した地域のランドスケープ、いわば「運動競技の原風景」を伴っていることがある。競技施設の巨大化は競技の原風景と開催地の既存環境との乖離において起きる。ひとつの都市という開催地から競技の場所を開放すれば、これとは異なるオリンピック・パラリンピックのランドスケープが生まれるだろう。

Hosting the Olympic and Paralympic Games involves the construction of large-scale facilities to hold the sports, which create a city-scale landscape. The reason for the scale of each facility is the specifications of the basic environment required by sports rule. Some sports are accompanied by the landscape of the region where the game was established. The facilities scale occurs due to the gap between the original landscape of the sports and the existing environment of the Olympic and Paralympic Games site.

For the new Olympic and Paralympic landscape, it might be the time to consider holding the each sport in the right place.

Keywords: オリンピック、ランドスケープ、運動競技、スタジアム
Olympic games, landscape, sports games, stadium

1 はじめに

本稿では、オリンピック・パラリンピック競技大会は特有のランドスケープをつくる、もしくはランドスケープが生成する契機となることを論じ、そのうえで運動競技大会と特定の都市や地域とを切り離す可能性について述べる。

オリンピック・パラリンピック競技大会はランドスケープ¹⁾をつくる。

そのランドスケープには、複数のスケールにおける事象が含まれている。

ひとつは、都市のスケールである。オリンピック・パラリンピック競技大会が都市のスケールでランドスケープをつくることは、あらためて述べるまでもないだろう。オリンピック・パラリンピック大会や、それに準じる大規模な国際運動競技大会の開催は、運動競技施設や宿泊施設、道路や公園などの都市基盤施設の整備の契機となる。東京においても、国立代々木競技場、駒沢オリンピック公園、江ノ島ヨットハーバーなど、1964年の大会のために建設された施設のいくつかは現在でも利用され、一部は今回の大会でも利用される予定である。

もうひとつは、それぞれの競技のスケールである。運動競技はランドスケープを含んでいる。本稿ではこのスケールに注目する。むろん、それぞれの競技が含むランドスケープは、その集積としての都市のスケールのランドスケープに関わっているが、競技のランドスケープに注目することは、何が都市スケールの「オリンピック・パラリンピック景観」を作り出すのかという理解のために必要である。

2 ルールが作る風景

オリンピック・パラリンピック競技大会は、運動競技(スポーツ)の大会であり祭典である。

スポーツのエートスは「勝敗の決定による強さの決定」(川谷, 2012)である。

勝敗を決定する方法がルールである。ルールが運用されるためにはそれを支える基盤が必要である。すなわち、ルールの運用をフェアにするために前提条件を揃えておくことである。この操作が、ゲームの前提条件をなしている。

条件を揃えるルールの対象のひとつには、参加する選手の身体がある。

多くの競技は男女の性別によって試合が分けられている。性別の定義には議論の余地はあるが、一般的に男女には身体の差があり、混在することがむしろ不公平であるとされているためである。格闘技系の競技には体重によるクラスがある。パラリンピックの競技にも種別・階級別がある。これらは競技を多様にするために行われているわけではなく、その競技を公平に行うために、身体条件を揃えておくことが目論まれる。競技によっては、参加選

手が身につけるユニフォームや靴、用具などの装備にも細かい規定がある。そして選手の身体の状態を人為的に操作するドーピングは禁じられ、違反者は処罰の対象となる。

つまり、体重 100 キロの選手が体重 40 キロの選手にレスリングで勝ってもそれは真に強さを示したとは見なされないし、薬物で筋肉を増強したり精神を高揚させてゲームに勝ってもそれは真の強さとは見なされない。こうしたルールの有り様は、その競技において何が勝負であり、何が「それで勝っても強さの証明にはならない」と考えられているかを示すものである。

もうひとつは、運動競技の環境条件である。

競技はそれが開催される環境が整備されている必要がある。それぞれの競技には、競技ごとに開催の基盤となる環境に対する具体的で厳密な要求がある。競技の基盤は、どこで開催されても同等の条件が供されることが期待されている。その条件が揃っているからこそ、世界の様々な場所での競技大会の記録を比較して「世界新記録」や「オリンピック新記録」を見定めることが可能になる。

もっとも、後述するように競技によって基盤環境の同等さの質は異なっている。その違いから、その競技では何が競われ、何が強さを示すと考えられているかを読み取ることができる。そのような、競技によって異なる基盤条件の違いは、オリンピック・パラリンピック競技大会のように、様々な競技の会場がひとつの都市・地域に集約されることで際立って見える。

3 運動競技の原風景

運動競技の基盤環境は、その競技が生まれた、もしくは発達した地域の固有の風景を彷彿させる設えを伴っていることがある。

私がこれを強く感じたのは、ロンドンオリンピック大会 (2012 年) における、ビーチバレーボール競技の様子をテレビを通じて見たときのことであった。

ビーチバレーボールはアトランタ大会 (1996 年) から正式種目として採用された、比較的新しい競技である。1910 年代にハワイのワイキキビーチ、またはカリフォルニア州のサンタ・モニカの砂浜で始まったとされている (FIVB, 2020)。

ロンドンオリンピック大会では、ロンドンの中心部、バッキンガム宮殿に近いセントジェームズパークの一角にあるホース・ガーズ・パレードに仮設会場が設けられた。

ホース・ガーズ・パレードは王室関係の建物に囲まれた、近衛兵の観兵式などが行われる広場であり、あまりビーチ性を感じる場所ではない。そこに作られた、砂を敷き詰めたビーチバレーのコートや、水着のようなユニフォームで戦う選手の映像は、まるで写真を切り貼りしたように周囲の風景から浮いて見えていた。

ロンドンに仮設の砂浜が作られるのは、砂の地面がビーチバレーボールという競技が要求するルール of 基盤だからである。国際バレーボール連盟 (Fédération internationale de volley-ball) 公認のルールブック (国際バレーボール連盟, 2016) には、ビーチバレーボールの世界大会・公式大会では、コート of 砂は小石などがないようにふるいにかけ、40センチメートル of 厚さをもって敷設しなければならない、とある。均質に整えられた厚さ40センチメートル of 砂の層が、ビーチバレーボール of 競技 of 公平性を支えている。

ビーチバレーボール of 誕生は定かではないが、もともと屋内で行われていたバレーボールから派生して、20世紀初頭にハワイ、またはカリフォルニア of 砂浜で行われるようになったようだ (日本ビーチバレーボール連盟, 2020)。

東京大会においてもビーチバレーボールは公式競技である。会場はお台場近くの潮風公園が会場に予定されている。当該敷地は埋立地であり、地理的には砂浜よりも干潟が相応しい立地であるが、海の近くであり、ビーチ of 文脈はまだ感じられはすると言える。会場が実際に砂 of 豊富な海岸 of 砂浜であれば、ふるいにかけて粒度を整えた砂を40センチメートル of 深さに敷き詰めるのはそれほど難しいことではないだろう。コート of 整備という点では、ワイキキやサンタ・モニカで開催するほうが、ホース・ガーズ・パレードで開催するよりも遥かに容易であるはずである。

このように特定の競技がそのルール of 基盤環境として持っている、その競技 of 由来 of 地を彷彿させる風景 of 片鱗を、その運動競技 of 原風景と呼ぶことにする。

4 原風景を支える施設

競技の原風景はビーチバレーボールに限らず、いくつもの競技の設えに見出すことができる。

たとえば、カヌーのスラローム競技である。スラローム競技はホワイトウォーター (white water) と呼ばれる、白波を立てて蛇行しながら激しく泡立つ流水の上で行われる。東京オリンピック・パラリンピック大会では、江戸川区の葛西臨海水族園に隣接した会場にカヌー・スラロームセンターが建設された。

2019年7月に完成したコースは「国内初の人工スラローム競技コース」であり、「競技コースの長さは約200メートル、平均幅は約10メートル。ポンプ設備で水をくみ上げ、毎秒12立方メートルをコースに送水することで激流を生み出す」という(日刊建設工業新聞, 2019)。

言うまでもなく、競技コースは激流の川を模したものである。河川の上流、山間部などの地形的に急峻で流れの速い場所で行われ、その特殊な環境条件のもとで発達した競技が「公式」となったために、「激流」が開催のための基盤環境として要求されるようになった。つまり、この競技の本質は「激流の中でカヌーの操作の巧みさを競う」ことであると考えられており、それを支える基盤として水の有り様が規定されているのである。

カヌー・スラロームセンターの敷地は、以前は下水処理場の一部として使われていた埋立地である。1970年代に埋め立てが進む以前は中川の河口に発達した干潟が広がっていた。水や川には関係があるが、ホワイトウォーター的激流とは関連が感じられる土地ではない。そのような敷地に多摩川の上流の御岳溪谷のような基盤環境を作るために、ポンプ設備を備えた施設が作られたのである。

他には、自転車のBMX競技がある。BMXも2008年の北京大会から正式種目となった新しい競技である。BMXはオートバイのモトクロスに倣って始まった自転車競技だと言われている。モトクロスは、1920年代にスコットランド南部で行われたオートバイのクロスカントリー・レース「Southern Scott Scramble」がその起源だとされている(Youngblood, 2020)。BMXの原風景は起伏の激しいスコットランドの田舎道なのである。今回の大会では、有明

アーバンスポーツパークがその会場にあてられている。会場施設の鳥瞰図から、平坦な埋立地に造形された凹凸のコースを見ることができる。

その付近にはスケートボード競技の会場がある。スケートボード競技は東京大会から正式種目となった。競技会場には「街にあるような階段や手すり、縁石やベンチ、壁や坂道などを模した直線的なセクション（構造物）を配したコース」（東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会，2020）で行われる「ストリート」と、より抽象的に造形されたコースの「パーク」という種目がある。

スケートボードは1950年代にアメリカ西海岸のサーファーによって行われはじめたとされ、当初は“sidewalk surfing”と呼ばれたという（Marcus, 2011）。スケートボードの原風景は「街」である。

スケートボード競技のための基盤環境として、街にあるような要素がわざわざ造形されているのは象徴的である。スケートボードやBMX、ホワイトウォーターのカヌーといった運動競技は、エクストリームスポーツと呼ばれる。エクストリームスポーツには明確な定義はないが、公式化・制度化した運動競技から逸脱して、より野蛮で自由な運動を求めて行われるものである（Brymer & Schweitzer, 2013）。ところが、その自由な形式が一定の支持を得て公式競技となると、「逸脱の仕様」が基盤環境となり、もとの競技よりも手のかかる設えになるのである。

5 基盤環境としての芝生

競技の原風景はこのような極端な運動競技だけに見られるものではない。

たとえば、サッカーやラグビーの競技場には、芝生が敷き詰められている。

競技の背景として、芝生に覆われた大面積のフィールドは印象的な景観を作り出している。選手やボールの動きと濃い緑色の芝生の色は鮮やかなコントラストをなし、写真や動画にも良く映える。

サッカーという競技が芝生の上でないと成立しないというわけではないが、「公式な」大会は、手間ひまをかけて整えられた芝生の上で行われる。

造園学者の北村文雄は、芝生が運動競技に用いられる理由として、安全性（密に柔らかく茂った葉による衝撃の吸収）、弾力性（芝の葉が持つ復元力）、清

浄性(土の付着を防ぐ)、美観性(緑の美しさ)の4つを挙げている(北村, 2001)。

サッカー、ラグビー、野球、クリケットなど、広い面積を使って行われる球技には芝生の地面が用いられることが多い。こうした競技では、ボールを追って選手が活発に動き回るが、それに伴って跳躍したり転倒したりする選手の身体を芝生が受け止めている。芝生の程よい硬さと弾力と摩擦がアクロバティックな身のこなしを可能にしているように見える。

しかし、サッカーが先あって芝生を選んだのではない。それらの競技がもともと、芝生の上で始まったと考える方が自然だろう。芝生の上の遊戯が制度化されて「競技」となったとき、芝生がその前提としてルールに取り込まれたのである。

先に挙げた運動競技は、いずれもイギリスが発祥とされている。イギリスの風景において、芝生が重要な位置を占めていることはしばしば指摘されることである(遠山, 2002)。盛んな牧羊によって牧草地の風景が形成され、それを基盤としてイギリス自然風景式庭園が発達した。芝刈り機が発明されたのもイギリスである。

芝生に用いられる素材としての植物にはいくつかの種がある。ほとんどの芝はイネ科の草本である。生育に適した地域の気候によって、寒地型と暖地型に分類することが一般的である(中村, 1979)。日本の大部分の地域に適した芝は暖地型で、冬季に休眠するために茶色く枯れて見えるという特徴がある。冷涼で湿潤なイギリスの芝生では寒地型の芝が使われている。寒地型の芝は一年を通して緑の葉が保たれるという特徴がある。しかし、地域によっては寒地型の芝生がうまく育たない。

たとえばアメリカである。公園や高速道路、住宅地までアメリカでは人の住むところはほとんど芝生に覆われている(Jenkins, 1994)が、アメリカ本土は国土が広く、寒地型に適した地域と暖地型に適した地域が混在している。

アメリカで運動競技の基盤として常緑の芝生の需要が起きたのは1950年代から1960年代にかけてである。この背景として、カラーテレビの普及が指摘されている(Jenkins, 1999)。メディアを通じて観戦するアメリカン・フットボールや野球などの競技の画面として、緑色の芝生のほうが美しい絵にな

る、つまり「テレビ映え」するからである。テレビの普及とともにショービジネス化が加速した運動競技にあって、芝生は視覚的な「消費の対象となった」（石川・小野，2002）。枯れた芝生に緑色の塗料で彩色する技術や、人工芝が開発されたのもこの時代である。現在では、芝の品種改良や、土壌の温度コントロールなどの高度な芝の基盤環境制御技術が発達し、多くのスタジアムで天然芝の常緑が実現している。日本の多くのサッカースタジアムにもこうした技術が用いられている。

このように、運動競技の原風景が求める基盤環境と、開催地の自然環境や土地の状態との間に乖離があるとき、その基盤を支えるために競技会場は施設化する。その乖離が大きいほど、施設は大掛かりになる。葛西の埋立地に作られたカヌー・スラロームセンターの様子は、カヌーのスラローム競技の原風景と開催地の環境との齟齬がつくるランドスケープである。大掛かりな装置によって地中温度が管理され、散水や芝刈りが細かく行われるサッカーフィールドは、高温多湿の日本で寒冷型の芝生を維持するための工夫のランドスケープである。

6 ゴルフの田園、マラソンの都市

芝生を基盤とする競技に、ゴルフがある。運動競技のランドスケープという観点から、ゴルフは興味深い特徴をもっている。

ゴルフには競技施設であるゴルフコースの空間に対する物的な規定がない。英国ゴルフ協会と全米ゴルフ協会によるゴルフのルールを定めた規則本「Rules of Golf」には、ジェネラルエリア、ティーイングエリア、バンカー、ペナルティーエリア、パッティンググリーン、というコースを構成する要素の定義があり、それらが競技の中でどのように扱われるかというルールはあるが（日本ゴルフ協会，2019）、それぞれの要素の形状を具体的に規定するルールは明示されていない。

ゴルフコースは他の球技と比べると競技場としての面積的な規模が大きく、屋外に設置されるため、設置される土地の特徴を反映して固有の形状をなす。ゴルフコースは、世界中にふたつと同じものがない。ゴルフコースの個性は、その地域の自然環境と、設計者・施工者による、ゴルフを競技化するコース

の仕掛け「Golf Architecture」(Shackelford, 2003)にあらわれる。ゴルフコースにおいて、プレイヤーは対戦相手とともにコースの仕掛けと対決する「意思決定のスポーツ」(印南, 2012)である。

しかし、実際にゴルフコースに身を置いてみると実感することだが、ゴルフコースの風景には共通する強いゴルフコースらしさがある。

ゴルフコースらしさをつくる主要素は、奥行き長い芝生と地面の起伏である。この共通点が示しているのは、カップを目指して球を打ちながら進むというゴルフの競技が要求する基盤環境が、起伏のある芝生であるということである。芝生はその刈り込み方によってコース上のエリアが分けられている。これに、バンカーやコース間の樹木や池や流れなどが加わってゴルフコースのランドスケープをつくっている。

ゴルフコースの芝生の維持管理・育成管理には多大な労力が使われている(眞木, 1989)。世界の様々な気候帯にゴルフコースが作られていることは、芝生の管理技術がそれぞれの地域の気候に対して発揮されていることを示すが、それはあらゆる地域で同じような質の基盤環境を設えるために労力が費やされているということである。

空間の規定がないにもかかわらず、ゴルフコースには具体的な風景モデルがある。ゴルフが現在のような競技として確立したのはイギリスのスコットランドであり、スコットランドの海岸にあるセント・アンドリュースのオールドコースは世界で最も古いゴルフコースとされ、現代でもゴルフコースのデザインの重要な参照先であり続けている(Shackelford, 2003)。つまり、ゴルフコースはスコットランドの海岸という具体的で強い原風景をもっている。スコットランドの海岸の気候と、世界中のゴルフコースがある各地域の気候との乖離が、芝生の高度な育成・維持管理という運用行為の負担となってあらわれている。

芝生が施設化するのには、芝が生き物であり、基盤を整えるには芝の生育環境を整える必要があるからであるが、近年、人工芝の技術が進み、ゴルフも含めた芝生競技の基盤として見直されつつある。先述のように、人工芝は冬季における芝生の見栄えを代替するために発達したと言われているが、製品の性能の改良が進み、「使える」ものになった(World Rugby, 2018)。人工芝

の利用は芝生を基盤とする競技の開催に対する地域や気候や季節などの制約を大きく軽減させるものであり、競技の原風景という観点からも注目に値する²⁾。

原風景がそれほど感じられない競技としてマラソンがある。マラソン競技は1896年のアテネ大会において、故事に由来するマラトン—アテネ間の公道を使った長距離走がその最初である。公道競技であるマラソンは、既存の市街地の道路をそのまま利用するため、ゴルフのような強い競技の原風景を持っていない。つまり、マラソン競技はギリシャの風景や路面の状態の再現を求めているわけではない。マラソンのルールが基盤環境に要求するのは距離だけであり、そのルールに従って、選手は道路や街路を走る。

競技の背景をなしているのは実際の都市の風景である。マラソン競技の報道では、2時間以上にわたって開催都市の風景が映される。この視覚的な地域広告効果は十分に承知されているだろう。

シドニー大会では、スタートから間もなく、ポート・ジャクソン湾を渡るコースが設定され、対岸のオペラハウスを見ながらアーチ型鉄橋のハーバブリッジを渡る印象的な映像が放映された。北京大会では、スタート地点に天安門広場という象徴的な風景が選ばれた。ロンドン大会のテムズ川沿いの名所巡りのようなコースや、リオ・デ・ジャネイロの明るい砂浜に沿って緩くカーブしながら続くコースなど、マラソン競技はその都市を象徴し印象づける風景が映されるコースが選ばれてきた。

しかし、2020年東京大会では、開催日程における東京の気温の高さによる競技環境の劣悪さが指摘され、2019年12月にマラソン競技は札幌で行われることに決定した（東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会、2019）。

この措置は、原風景を持たないマラソン競技であっても、公式競技としての実施にあたってはその基盤環境に輪郭が想定されていることを示すものである。つまり「場所は問わないにしても限度がある」ということだと言える。マラソンの要求する基盤環境は街路／道路の平坦さと、定められた距離と、選手が快適にその力を発揮できる気温なのだった。

7 スタジアムの原風景

オリンピック・パラリンピック大会がつくるランドスケープにおいて、最も巨大な構造物となって祭典を象徴するものは、オリンピックスタジアムだろう。多くの開催都市において、オリンピックスタジアムは大会後も記念碑的な建築物として残され、活用されている。

今回の東京大会のメイン会場となるスタジアム、国立競技場も大規模な構築物である。ここでは開会式・閉会式のほか、各種の陸上競技やサッカーが行われる予定である。

国立競技場は、1964年の東京オリンピック大会でメイン会場として使われたスタジアムの跡地に建設された。設計にあたっては、国際デザインコンペが実施され、建築家のザハ・ハディドらが設計者として指名されたが、紆余曲折の経緯の末に白紙撤回となり、その後の選考で設計者が建築家の隈研吾らに変えられて建設されたものである。このプロジェクトを巡っては様々な議論が行われたが(青井, 2014)、計画案に対する批判としてまず槍玉に挙げられたのは「その巨大さ」(楨, 2013)であった。

もちろん、スタジアムの巨大さは建築設計者の責任ではない。設計者は課された要求事項を具体的な形態にして応えたのである。実際、問題となった設計案だけが巨大だったわけではなく、いずれの設計案も神宮外苑の景観を変える巨大さをもっていた。

なぜ、スタジアムは巨大なものになるのだろうか。

現在のスタジアムの原型は、ギリシャのオリンピア遺跡にあるスタジアムに見ることができる。

19世紀末に、ドイツ考古学研究所によって発掘・調査されたオリンピア遺跡は、ここで開催されていた古代オリンピック競技大会の様子を窺うことができる。

古代のスタジアムは遺跡の一角にあり、ヘラの神殿とともに、現代のオリンピックの聖火の採火式が行われる会場として知られている。古代オリンピックにおいて、ここでは徒競走や円盤投げ、槍投げなどが行われたという。

スタジアムは、幅約30メートル、長さ約200メートルの平坦なトラックを観客席である斜面が取り囲む、細長いすり鉢のような形状をなしている。この、

平坦で固い地面とそれを囲む傾斜した観客席という組み合わせは、現代でも基本的に変わらないスタジアムの構造をなしている。

平坦で固い地面が中央に置かれるのは、陸上競技のルールが要求する基盤環境のためである。陸上競技は均一に平坦な地面によって、選手の身体能力の強さが正しく競われると考えられている。

この平坦な地面が観客席の斜面を作り出している。私たちヒトの身体の構造上、平坦な地面で行われていることを見渡すためには、その地面よりも高いところから眺める必要がある。さらに、人々の身体の形状がほぼ同一であるために、多くの人が競技を見るためには前の人よりも更に高い位置に着地している必要がある。そこで傾斜した地面が必要となる。多くの人が平坦面を目撃できる状態で集まるために、すり鉢状の会場が必要になるのである。

オリンピア遺跡の見取り図や、周囲を含む空中写真などを見ると、古代のスタジアムは浅い谷に配置され、観客席の斜面は地形を利用して作られていることが読み取れる。これは合理的な建設方法である。大人数の観客席という形式はもともと地形を利用することから始まったのだろう。

つまり、スタジアムの原風景はすり鉢状の地形である。スタジアムは地形の施設化にほかならない。谷底の平坦面を大きく確保し、それを取り囲む観客席の収容人数を増やすほどに、地形を人工的に作り出しているスタジアムは巨大化するのである。

8 ランドスケープをつくる運動競技

以上、いくつかの事例を挙げて、運動競技がその基盤環境を整えるために施設が建設されるという事情を競技の原風景という観点で検討した。

東京オリンピック・パラリンピック大会で行われる競技について、その基盤環境に注目して整理したものが表1である。

「会場」は各競技が開催される施設や場所、「競技環境」はそれらの会場の基盤環境がどのような施設で供されているかを示す。施設は A. 屋内、B. 競技施設、C. 既存環境、の3つに分類して示した。以下にそれぞれの特徴を述べる。

表1 基盤環境に注目した競技種目

	オリンピック競技	パラリンピック競技	会場		競技環境		
			オリンピック会場	パラリンピック会場	A. 屋内	B. 競技施設	C. 既存環境
陸上競技	陸上競技(トラック、フィールド)	陸上	国立競技場	国立競技場		●	
	競歩		札幌				●
	マラソン		札幌				●
体操	体操(体操、新体操、トランポリン)		有明体操競技場		●		
	ウェイトリフティング	パワーリフティング	東京国際フォーラム	東京国際フォーラム	●		
水泳	競泳	競泳	東京アクアティクスセンター	東京アクアティクスセンター	●		
	飛び込み		東京アクアティクスセンター		●		
	アーティスティックスイミング		東京アクアティクスセンター		●		
	水球		辰巳国際水泳場		●		
	マラソンスイミング		お台場海浜公園				●
球技	バドミントン	バドミントン	武蔵野の森総合スポーツプラザ	国立代々木競技場	●		
	バスケットボール	車いすバスケットボール	さいたまスーパーアリーナ他	有明アリーナ他	●		
	ハンドボール		国立代々木競技場		●		
	卓球	卓球	東京体育館	東京体育館	●		
	テニス	車いすテニス	有明テニスの森	有明テニスの森		●	
	バレーボール	シットイングバレーボール	有明アリーナ	幕張メッセ	●		
		ゴールボール		幕張メッセ	●		
		ポッチャ		有明体操競技場	●		
	野球、ソフトボール		福島あづま球場、横浜スタジアム			●	
	サッカー	ブラインドサッカー	埼玉スタジアム 2002 他	青海アーバンスポーツパーク		●	
	ホッケー		大井ホッケー競技場			●	
	ラグビー		東京スタジアム	国立代々木競技場		●	
	ビーチバレーボール		潮風公園			●	
ゴルフ		霞ヶ園カンツリークラブ			●		
格闘技	ボクシング		国技館		●		
	フェンシング	車いすフェンシング	幕張メッセ	幕張メッセ	●		
	柔道	柔道	日本武道館	日本武道館	●		
	空手		日本武道館		●		
	テコンドー	テコンドー	幕張メッセ	幕張メッセ	●		
	レスリング		幕張メッセ		●		
射術	アーチェリー	アーチェリー	夢の島公園アーチェリー場	夢の島公園アーチェリー場		●	
	射撃	射撃	陸上自衛隊朝霞訓練場	陸上自衛隊朝霞訓練場		●	
自転車	自転車(トラック)	自転車	伊豆ベロドローム	伊豆ベロドローム他		●	
	自転車(BMX フリースタイル、レーシング)		有明アーバンスポーツパーク			●	
	自転車(マウンテンバイク)		伊豆MTBコース			●	
	自転車(ロード)		武蔵野の森公園他				●
馬術	馬術(馬場馬術、障害馬術)	馬術	馬事公苑	馬事公苑		●	
	総合馬術		馬事公苑、海の森クロスカントリイコース			●	
乗舟	カヌー(スラローム)		カヌー・スラロームセンター			●	
	カヌー(スプリント)	カヌー	海の森水上競技場	海の森水上競技場		●	
	ボート	ボート	海の森水上競技場	海の森水上競技場		●	
	セーリング		江の島ヨットハーバー				●
	サーフィン		釣ヶ崎海岸サーフィンビーチ				●
総合競技	近代五種		東京スタジアム他		●	●	
	トライアスロン	トライアスロン	お台場海浜公園他	お台場海浜公園他			●
その他	スケートボード		有明アーバンスポーツパーク			●	
	スポーツクライミング		青海アーバンスポーツパーク			●	

A. 屋内：いくつかの種目では、人工的に制御された条件で行われる競技のために、開催地の環境と切り離された基盤環境が供される。このための競技施設は屋内空間を有した建築物となって、都市に競技施設のランドスケープをつくる。

B. 競技施設：競技の基盤環境が、芝生や水面といったその競技の出自の自然に依拠したものでありながら、開催地の自然環境との間に乖離がある場合がある。その乖離を埋めるための施設が建設されて競技施設のランドスケープをつくる。前述の理由からゴルフコースもここに分類した。総合馬術のクロスカントリーもその基盤は屋外の自然環境に依拠しているが、会場は東京湾の埋立地に設けられたコースであるため、ここに分類した。本稿ではこのB.にあらわれる、競技が求める環境基盤を「運動競技の原風景」と呼んだ。

C. 既存環境：マラソン、自転車のロードレース、セーリング、サーフィンなど、基盤環境が広く既存の自然や都市環境に依拠する競技は、既存の土地を加工せずに利用する。そのため、その地域のランドスケープが競技のランドスケープとなる。

運動競技の原風景が施設化する過程は、以下のようにまとめることができるだろう(図1)。

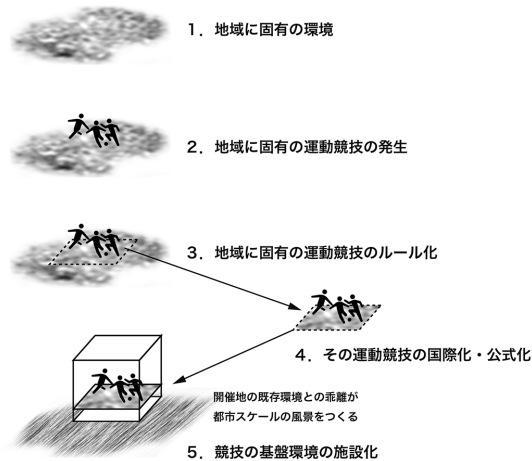


図1 運動競技の原風景の施設化

(1) 地域に固有の環境：ある地域に、その地域に固有の自然／人工環境がある（風景）。

(2) 地域に固有の運動競技の発生：その固有の環境において、環境を利用した運動競技が考案され、行われる。

(3) 地域に固有の運動競技のルール化：その運動競技のルールが定められる。この段階で、地域の環境は競技の基盤環境となり、競技の内容と基盤環境の関係が固定化される（原風景化）。

(4) その運動競技の国際化・公式化：その運動競技を世界の異なる地域でも開催できるように、地域に固有の環境から競技に必要な特性や要素が競技の基盤環境として見いだされ、ルールに取り入れられる。

(5) 競技の基盤環境の施設化：その運動競技が開催されるにあたって、開催地の自然／人工環境と、競技の原風景とに乖離があるとき、競技が要求する基盤環境は人工的に建設される（原風景の施設化）。

上記の過程に、スタジアムが巨大化する理由を「スタジアムの原風景」と見なすと、以下の項目が加えられる。

(6) 大会が要求する施設：オリンピック・パラリンピック大会のように、多くの観客がその場で観覧することを考慮したとき、それを支える観客席は大きな構造物となる。

オリンピック・パラリンピック大会は多くの観客を集めることが目指される祭典であり、その中心的な施設は巨大なものとなり、都市に無視できない景観的な変化をもたらす。これを都市のランドスケープとして捉えたとき、そのつくり方にはふた通りの方法があると考えられる。ひとつは、その巨大さ自体を対象とした意匠を試みるものであり、もうひとつはその巨大さを感じさせない意匠的な工夫を凝らすものである。東京 2020 オリンピック・パラリンピック大会のスタジアム、国立競技場の設計においては、最初に検討されたザハ・ハディドらによる計画案は巨大な構造そのものを象徴的に造形する、前者の方法をとるものであった (Zaha Hadid Architects, 2015)。一方で、最終的に採用され実際に建設された隈研吾らの計画は後者であった。隈はその設計意図を、コンクリートや鉄に代えて「木を徹底的に用いること」、競技場

の巨大な姿を「重層するひさしと縁側状の中間領域」を設けて穏やかな外観とすること、と説明している(隈, 2019)。完成したスタジアムは細い木材で覆われ、緑化が施されており、当初の計画案と比較すれば「都市と再接続」(隈, 2019) されていると見なせるだろう。

外観を小さな部材で覆うことによって施設の巨大さを緩和する方法は、巨大な建造物の表層にしばしば用いられる。たとえば東京スカイツリーの意匠などもそのように解釈しうる(石川, 2018)。この方法の特徴は、外観の意匠と、その施設の構造や意味との必然的な関係が感じられないことである。国立競技場の仕上げは木材と植栽という素材によって神宮外苑の風景に寄り添ったものになった。しかし、明治神宮外苑に5万人近い人を楕円形に座らせる地形を内包する巨大施設が建設されたという事態そのものは、隈研吾らの巧みな意匠で覆われ、不可視なものとなった。都市のスケールのランドスケープは穏やかなものになったが、スタジアムの原風景と東京の風景の乖離は残されている。

9 おわりに 世界へ帰るオリンピック・パラリンピック

2020年4月、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行の影響で、2020東京オリンピック・パラリンピック大会の開催が延期された。現段階では治療方法や予防方法もまだ模索されている最中であり、感染の流行を抑えるためには世界中で「動かずやり過ごす」以外の対策が取れない状況である。その中で、世界中から人を集めることによって成り立たせる祭典の開催を断念しなければならぬのは当然であった。

オリンピック大会は、開催都市の変貌のポリティクスとなりつつ「都市およびインフラの改良と、オリンピックのための施設、および既存の建物の適切な再利用」(ニリオ, 2015) に貢献もしてきた³⁾。しかし、感染症の流行は、オリンピック・パラリンピック大会を開催する理由そのものを問い直す契機をもたらしている。感染症への対策において共有されつつある新しい行動に、実空間に集まらないことと、ネットワーク技術を用いた遠隔からの情報交換がある。これらは施設の建設の根柢を揺さぶるものである。

2020年の大相撲春場所で行われた、実空間に大人数が集合することを避け、

観客がメディアを通じて競技を視聴した「無観客試合」は示唆的であった。先述のように、施設の巨大化の要因のひとつは「沢山の人が集まる」ことである。大規模な観客席が不要であれば、たとえばサッカースタジアムは「スタジアム」である必要はなく、サッカーフィールドであればいいことになる。観客席の不要は、国立競技場に限らず多くの大会施設の設計条件を大きく変え、オリンピック・パラリンピックの風景を変えるであろう。

競技の施設化のもうひとつの要因は運動競技の原風景と開催地の環境との乖離であった。これも、すべての観客がネットワーク技術を用いたメディアを通して視聴するということが前提となれば、大掛かりな設備によって基盤環境を建設する意味は薄れるだろう。本来、競技はその原風景の土地で行われることが、環境への負荷が少なく、より持続可能なありかたである。それは、カヌーのスラローム競技がコロラドの渓谷で、ビーチバレーボールがハワイの砂浜で、ゴルフがセント・アンドリュースで開催される風景である。

グラフィックデザイナーの原研哉ら(1999)は、オリンピック大会の会場を世界に分散し、「巨大な施設や都市機能の整備を見据えた、インフラ整備のためのオリンピック、という考え方を捨て」「競技は世界各地で分散して行い、視聴者は時差を利用して「休まないオリンピック」を経験しつつ、世界のグローバルな広がりを見出す」アイデアを提唱した(原研哉ら, 1999)。私もチームの1人としてこのプロジェクトに参加していた。

その提案はオリンピックを都市に誘致する意義を問い直すための、一見荒唐無稽なスペキュラティブ・デザインであったが、図らずもひとつの都市に人が集中することの意味を見直すことが求められた今日、このような風景像は再考に足るものとして浮上るように思われる。

注

- 1) 「ランドスケープ」には様々な定義がありうるが(石川, 2018)、ここでは私たちを取り巻く環境の様態の、主に視覚を媒介として人と環境との間に生じる関係のこととする。一般的に「風景」や「景観」と呼ばれる概念に近い。
- 2) 人工芝の使用は天然芝の安価な代替というだけでなく、競技そのものを変容させる契機となることもある。2020 東京大会でも正式種目であるホッケーは、競技場に青色の人工芝が敷設されている。ホッケーは1976年のモンテリオール大会以降、人工芝のフィールドが採用されており、人工芝によって球の速度や選手の動き

に大きな変化があったという(日本ホッケー協会, 2020)。今後、様々な芝生競技において人工芝の普及が進み、人工芝化、もしくは天然芝と組み合わせてハイブリッド化してゆくことは考えられる。競技のいくつかはそれによって形態が変化するかもしれない。

- 3) 2020 東京大会の施設計画において、国立競技場の景観問題の議論以外には、都市スケールのランドスケープが語られることはほとんどなかった。その点において、建築家の浅子佳英 (2014) による選手村の構想「ミニチュアトーキョー、マウントトーキョー」(浅子, 2014) は、埋立地の既存施設を利用しながら平坦な埋立地に山のような新しい地形を提案する、注目に値するものであった。

参考・引用文献

- 青井哲人、明治大学青井哲人研究室 (2014) 「新国立競技場関連記事データベース」
<https://shinkokuritsu-database.jimdofree.com/> (2020 年 4 月 10 日アクセス)
- 浅子佳英 (2014) 「ショッピングモール&テーマパークの発想でつくる東京五輪「選手村計画」——デザイナー・浅子佳英が考える“職住近接”の都市生活の未来」
<https://ch.nicovideo.jp/wakusei2nd/blomaga/ar638552> (2020 年 3 月 20 日アクセス)
- 石川初 (2018) 『思考としてのランドスケープ——地上学への誘い——』LIXIL 出版.
- 石川初、小野良平 (2002) 「芝生 緑の野の郷愁と呪縛」Landscape network 901 編『ランドスケープ批評宣言』INAX 出版.
- 印南一路 (2012) 『すぐれたゴルフの意思決定 「熟慮速断」の上達法』東洋経済新聞社.
- 川谷茂樹 (2012) 「スポーツのエートス再考——「決定」について——」『Contemporary and Applied Philosophy』(4), pp.65-78.
- 北村文雄 (2001) 『芝草物語』ソフトサイエンス社.
- 国際バレーボール連盟ウェブサイト https://www.fivb.com/en/beachvolleyball/thegame_bvb_glossary/history (2020 年 3 月 20 日アクセス)
- 隈研吾 (2019) 「新国立競技場整備事業 場所の多様性を示す」『新建築』2019 年 9 月号, 新建築社, p. 50.
- 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 (2019) 「マラソンコース決定について」<https://tokyo2020.org/ja/news/news-20191219-02-ja/> (2020 年 3 月 20 日アクセス)
- 遠山茂樹 (2002) 『森と庭園の英国史』文藝春秋.
- 中村一 (1979) 「造園と芝生——洋風と和風の視点から」『芝草研究』8 (1), pp. 5-8.
- 日刊建設工業新聞オンライン (2019) 「東京都/カヌー・スラロームセンター (江戸川区) が完成/激流再現、五輪競技で使用」<https://www.decn.co.jp/?p=108428> (2020 年 4 月 10 日アクセス)
- 日本ゴルフ協会編 (2019) 『ゴルフ規則 2019 年 1 月施行』日本ゴルフ協会.
- 日本ビーチバレーボール連盟ウェブサイト <http://www.jbv.jp/beachvolley/history.html> (2020 年 3 月 20 日アクセス)
- 日本ホッケー協会 (2020) 「ホッケーの歴史」<https://www.hockey.or.jp/rules/hockey/history/> (2020 年 3 月 20 日アクセス)
- ニリオ, オリンピア (2015) 「都市とオリンピック 都市の美学と新たな景観」『美學』66 (1), pp.21-29.
- 原研哉、石川初、岡崎浩司、清水徹、西村佳哲、早川淳 (1999) 「大地に溶けるスタジオ」『デザインの現場』16 (102), 美術出版社, pp.86-93.

- 横文彦 (2013) 「新国立競技場案を神宮外苑の歴史的文脈の中で考える」『JIA MAGAZINE』295, 日本建築家協会, pp.10-15.
- 眞木芳助 (1989) 「英米におけるゴルフコース管理法の比較と日本の課題」『芝草研究』18 (1), pp.23-40.
- Brymer, E., Schweitzer, R. (2013) “The Search for Freedom in Extreme Sports: A Phenomenological Exploration”, *Psychology of Sport and Exercise*. 14(6), pp. 865-873.
- Jenkins, V. S. (1994) *The Lawn—A History of an American Obsession*, Smithsonian Institution Press.
- Jenkins, V. S. (1999) “Fairway Living: Lawncare and Lifestyle from Croquet to the Golf Course”, *The American Lawn*, Princeton Architectural Press.
- Marcus, B. (2011) *The Skateboard: The Good, the Rad, and the Gnarly: An Illustrated History*, MVP Books.
- Shackelford, G. (2003) *Grounds for Golf: The History and Fundamentals of Golf Course Design*, St. Martin’s Press.
- World Rugby website “REGULATION 22. STANDARD RELATING TO THE USE OF RUGBY TURF” <https://www.world.rugby/handbook/regulations/reg-22/reg-22> (2020年3月20日アクセス)
- Youngblood, E. (2020) “The History of Motocross: An MX Series (1924-2000s)”, https://pigtailpals.com/blog/the-history-of-motocross/#the¥_birth¥_of¥_motocross¥_1924¥_through¥_1939 (2020年3月20日アクセス)
- Zaha Hadid Architects (2015) “New National Stadium”, <https://www.zaha-hadid.com/architecture/new-national-stadium/> (2020年4月24日アクセス)

[受付日 2020. 4. 15]